大学院生のフィールドワーク

［司会］　朝倉敏夫　総合研究大学院大学教授地域文化学専攻/国立民族学博物館教授
［出席者］　高 正子　総合研究大学院大学地域文化学専攻
南出和余　総合研究大学院大学比較文化学専攻
山本 睦　総合研究大学院大学比較文化学専攻

朝倉　今日は、文化科学研究科の地域文化学、比較文化学専攻の院生として、何を、どのように研究しているかを話していただきたいのですが、まずは、自己紹介をかねて、皆さんのなさっている研究の内容からうかがいたいと思います。

高　私は、韓国の伝統文化と言われる仮面劇が、解放後の韓国でどのように継承されてきたかを、政府の政策面、社会とのかかわりを中心に、演戯者に着目してとらえてみたいと考えています。

南出　私は、修士課程では、バングラデシュの農村部で急速にすすんでいる教育の普及がローカルな子どもの生活世界に及ぼす影響を、公教育のあり方という観点から研究していました。しかし、総研大での研究とフィールドワークを経て、学校教育の面だけでなく、もっと広い観点から子どもを見てみたいと思うようになりました。今は、学校外の大人や社会とのかかわりを含めた子どもの生活世界を、バングラデシュの農村の中でとらえた論文を書きたいと思っています。

山本　学部生のときから私は、アンデス文明形成期（紀元前2500～紀元前後）を研究しています。2003年には、ペルー共和国カハマルカ県で、紀元前1800～800年頃の遺跡であるラス・ワカスの調査に参加していました。この遺跡の最大の特徴は、かつての複合社会の存在をうかがわせる巨大な建造物です。約150m四方の範囲に複数の建造物が立ち並んでいて、最大の建造物は、東西約40m、南北50mに及び、住居とは異なる目的で建設されたものと考えられます。

これまでは、そのような大規模建造物を擁する社会は、農耕の余剰生産の結果として生まれてくると言われてきました。しかし現在、アンデスでは、まず先に大規模な巨大建築物があった、つまり、建造物の建設によって生業などの諸活動が刺激され、複合社会が形成されていったのではないかというモデルが提起されています。私は、このモデルと対比しつつ、アンデス文明形成期の社会発展のプロセスを、考古学的な手法を用いて明らかにしていきたいと考えています。

朝倉敏夫（あさくら・としお）
大学で人類学と出会い、日本の家族研究から、韓国との比較、そして海外のコリアンへと関心が広がっています。対象地域の拡がりとともに、人類学の学説史研究がおろそかになっているのではと反省しています。研究対象とする社会が急激に変化する今、できるだけ早くフィールドワークに出て、自分の目で見ることが大切ではないでしょうか。

なぜ、研究の道を目指したのか

朝倉　それぞれ皆さんは地域もテーマも違うのですが、高さんは、なぜ韓国の仮面劇なのか、関心をもった経緯も少し話してくれますか。

高　私の場合、日本で生まれた韓国人として、自分が日本社会の中で韓国人であるということを肯定的にとらえるうえで、韓国の文化を知ることは不可欠の要素だったのです。

いろいろな韓国の伝統文化の中で、仮面劇に出会ったとき、これだという強い印象を受けました。そこに登場する一般の民衆が、とても魅力的だったのです。1970年代、韓国では、経済開発を最優先する政策がとられていました。いわゆる「開発独裁」といわれるものです。しかし、その厳しい状況の中で、仮面劇という遊びを通して、政府に対する批判をパロディにして語るのです。興味深いことに、その仮面劇は政府の庇護下にあって奨励され、継承されています。その仮面劇が日本に紹介されてすぐ、1983年くらいから、実際に自分でも演じながらかかわってきました。

しかし、研究していくうちに、自分がこうだと思ってきた仮面劇が、現場の韓国で、実際にはどのようにとらえられているのか、また、その担い手である演戯者たちはどのように社会とかかわって生きているのか、ぜひ確かめてみたい、と。実際に韓国に行って、現に生きている演戯者たち、つまり仮面劇とそれを取り巻く韓国社会の変化を、身をもって体験してきた人たちと日常的に交わる中で、伝統芸能としての仮面劇をとらえ直してみようと思いました。

朝倉　南出さんの行かれたバングラデシュですが、公教育は日本人にとっても問題にされるところですよね。

南出　私がバングラデシュに関心をもったのは、学部時代、学外での国際協力活動で初めてバングラデシュに行って、NGOによる「寺子屋学校」など、いわゆるノン・フォーマル教育の実態を見てからです。

そこで興味深かったのは、バングラデシュの子どもたちが、口々に「学校へ行くのがすごく楽しい」と言うことです。日本の子どもに「何が好きか」と尋ねたときに「学校」と答える子はあまりいないと

高　正子（コォ・チョンジャ）
日本で生まれた韓国人としての私は、民族的なアイデンティティを獲得する過程で韓国の仮面劇に出会いました。そこでの強烈な印象は、民衆の知恵としての痛快な風刺精神でした。それは、日本では劣ったもの、野蛮なものとして刻印されがちであった韓国文化の再考の機会を私に与えてくれました。今後、世界に離散した朝鮮民族にとってのアイデンティティと伝統文化とのかかわりをテーマとして研究したいと考えています。

思うのです。何が好きかと聞かれて学校と答える子どもたちにとっての「学校」とは何か。「行かなければならない」、「行くのが当然」の日本の学校とは違って、そこには学校に行くことによって得られる、何らかの希望や利益という動機があるはずです。それは、子どもの生活世界のほうから見ていかなければ理解できないのではないか。そう思ったのがバングラデシュの教育、子どもに注目するようになったきっかけです。

朝倉　日本でのアンデス研究は、とくに考古学の分野で長い歴史をもっているのですが、山本さん自身は、なぜアンデスの古代国家の研究にいったのですか。

山本　最大の理由は、子どもの頃からの強い興味です。本や雑誌の影響もあったと思います。大学を選ぶ時点から、アンデスの先史学を研究しよう決めていました。ほんとうの意味での研究は、学部での勉強、現地調査を経験してからですが、知れば知るほど、よい選択だったと実感しています。

アンデスの遺跡は、さまざまな意味で研究テーマの「宝庫」なのです。たとえば、先ほどお話しした公共建造物や出土する土器の形態には、広い地域で共通性が見られます。このことから、その時期、公共建造物を中心として統合されていたと考えられるそれぞれの社会間で活発な交流があったと推定されますが、では、それらの関係はどのようなものであったのか……。

アンデスは、険峻な山地が連続するだけでなく、非常に特異な環境下にあります。一応の予備知識はあったのですが、学部の調査で初めて訪れたとき、ほんとうに驚きました。車で何時間か移動しただけで、高度が一気に変化し、それにつれて、熱帯雨林から砂漠まで、さまざまな環境帯が連続的に見られるのです。現在は道路が整備され、車も山奥まで入っていけますが、スペインによる征服以前は、アンデスには車輪がなく、移動は自らの足に頼るしかありませんでした。そうした条件の中で、人々が他地域との交流を求めていった理由は何か、また、そのことが複合社会の形成とどうかかわるのか……。さらに、アンデスは文字が発明されなかった文明ですので、エジプトや中国などの他地域とまったく異なった社会の様相が、建造物などから見えてくるのではないか。これも、今後の展開が楽しみな研究テーマです。

どのような立場から見るのか

朝倉　それぞれの問題意識、関心の所在はだいぶわかってきましたが、実際の研究は「フィールドワーク」によって進められますよね。フィールドに入っての具体的な体験と、それとどう向き合っていったのかを話してくれますか。

高　私のいた仮面劇の演戯者集団は、いまは保存会という形をとっていますが、韓国の南部、慶尚南道固城郡（キョンサンナムドコソンダン）の出身者で、ふだんは村や街で暮らしています。私も、その中の馬岩面（マアムミョン）というところで、亡くなった技・芸能保有者の先生の家に寄宿していました。保存会は、4月くらいから6月まで、各地で週末に行われる祝祭に行って公演し、6月下旬から2ヵ月半は、夏休みの研修で仮面劇を学ぶために来る大学生たちを受け入れます。その後、また週末には各地を回り、12月になると、冬の研修の大学生たちが来て2月までいます。そのような1年のサイクルを、彼らの演じるものをそばで見ながら、時々、私も舞台に出て踊ったりしながら、生活を共にして過ごしました。

朝倉　高さんの場合は、はじめから言葉の問題はなかったのでしょう。

高　私の場合、韓国語はふつうに喋れるのですが、演戯者たちと村に入ってお年寄りと話をしていて、何人（なにじん）かと聞かれるので、「韓国人だから、韓国のパスポートを持っている」と言うと、「そうか、韓国語も上手だしね」と言ってくれます。しかし、私を誰か他の人に紹介するときは、「日本人」と言います。彼らは私を韓国人として認めていなくて、「日本で生まれたから、この人は日本人」という枠でとらえているのか、やはりそうなのか、と。

でも、あとでわかりました。「日本で生まれたから、この人は日本人」と言うとき、自分たちの枠組みの中に私を入れていないという一面があることは確かですが、彼らは、国籍としての韓国とか日本という区別をしているわけではないのです。たんに「どこで生まれた人か」という意味なのです。つまり「ソウルで生まれたらソウルの人」というような区分の仕方をしているだけなのです。

国家の枠をはめていたのは、私のほうだったのです。韓国人か、日本人か、どちらに受け取られるかが、日本にいるときにはとても重要なことで、「韓国人として生きよう」と、肩にすごく力が入っていた。韓国にいる人たちには仲間に入れてもらえないと決め込んで考えていたのですね。ところが、彼らの日常では、まったく違う意識でとらえられていた。私にとってはカルチャーショックであり、大きな経験でした。

朝倉　高さんにとって、それまで考えていたのと異なる韓国があっ

高さんのフィールドワークは、韓国の仮面劇。
伝統的なテーマを借りて、民衆の立場から、時の権力や社会を痛烈に風刺する。

たのですね。南出さんは、子どもという異なる世代の中に入っていくわけですね。そういう出会い、つながりというのは、どういうふうにもたれているのでしょうか。

南出　先ほど、高さんが「演戯者の側から見る」とおっしゃいました。フィールドワークでは、対象をどこから見るか、つまり、どういう立場に自分の身を置くかが非常に重要で、また、それが文化人類学にしかできないことだと最近、強く感じています。私は、子どもの側から社会を見ようと思っています。たとえば、教室の中で、子どもと席を並べて見るのと、先生の立場から見るのと、あるいは参観者のように後ろから見るのとでは、見え方がまったく違うはずですから。

私はいま、バングラデシュ北部、ジャマルプール県のある農村でフィールドワークを継続中で、村の農家に居候させてもらって、NGOが運営する学校を中心に調査活動を行っています。身体的には大人であり、違和感はあるでしょうが、毎日、子どもといっしょに学校に行って、席を並べて「勉強」しています。学校の先生も、私に宿題を出すし、宿題をしてこなければ怒るというような、あえてそういう立場をとってくれています。

もちろん、子どもとともにいくら時間を過ごしても、私には見えない部分があるのは確かです。人類学で子ども研究が少ないのは、やはり大人は子どもの立場になりきれない、という理由もあるのではないでしょうか。私は、そこにあえて挑戦する気持ちでやっています。

バングラデシュでは、子どもは2歳半くらいで母乳を離れ、13、14歳で結婚や労働を迎えるようになります。その10年の間に人々は母から家族、地域社会、あるいは学校と、絶えまなく人間関係を広げていきます。この、いわば人生の激動の10年を見ることは、バングラデシュの文化を理解する上で、非常に重要だと考えています。

朝倉　学校では、お弁当やおやつはどうなっているのですか。

南出　給食の制度はないのですが、海外からの支援で、牛乳やビスケットを配るという取り組みが最近なされています。ちょうどこの間、私が滞在していたとき、何人かの子どもがその「給食」を目当てに、勝手に「転校」してしまって。政府の学校では配られるけど、NGOの学校では出ないといったことがあったのです。先生が家庭訪問をすると、親は、「子どもがビスケットを欲しがるのは当然で、仕方ない」と。子ども・親・学校の関係性の一面を見た気がしました。

南出さんのフィールドワークは、バングラデシュ農村社会での子ども研究。
写真は、イスラームのコーラン学校で学ぶ子どもたち。

朝倉　山本さんは考古学ということで、人類学とジャンルは少し違うのですが、フィールドワークでは、やはり現地の人たちと交わって仕事をすることになりますね。本格的なフィールドワークはこれからですが、これまで何回か現地には行って来られた。

山本　現地に行って、まず実感したのは、私たちが調査に入ること自体が、地元の人たちにとって、たいへんなインパクトであるということです。経済的な意味合いだけでなく、村人のいろいろな思惑がこちらにどっと押し寄せてきて、まさに、村がもう一つのフィールドワークの場となるのです。たとえ一時的にせよ、研究者が調査に入ることによって、村の政治的な構造が大きく変わるといった可能性もあるわけです。

遺跡を1人で発掘することはとうてい不可能ですから、考古学では、地元の人たちの協力は最低条件として必要なのです。この点が、考古学のフィールドワークのもっとも大きな特徴だと思います。自分の行為、発言が、相手にとってどれほどの重みをもっているか。自分自身がいかに政治的なポジションにいるかということを、切実に感じます。

朝倉　高さんの場合は、先ほど、自分自身の無意識の枠という話をされましたが、国籍は韓国で、生まれ育ったのが日本という立場で、フィールドでの人たちの受け取り方はどうでしたか。

高　やはり、2種類の反応があります。たとえば、村の人たちがバスに乗って遊びに行くのについていくと、乗客の誰かが「日本の歌を歌ってよ」、と。それで歌い始めると、「日本の歌なんかやめてくれ」と言う人が出てきます。そういうとき、自分がどのようにこの人たちには映っているのだろうか、と考えざるをえませんでした。でも、村でいっしょに住んでいるおばあちゃんが、「なぜ、そんなことを言うのだ。いいじゃないか」と怒ってくれて。身近に暮らして親密な関係を築くことで、初めて自分の存在を理解してもらえるのだな、と再認識しました。

最初のうちは、調査地の村人、演戯者集団のメンバーも、たとえば、「資料として、家族関係を教えてほしい」と言うと、「いや、それは個人的な秘密だから」となかなか教えてくれません。ところが、1年半のフィールドを終えていざ帰るとき、「個人的なデータをコピーしていいか」と聞くと、「ここにあるよ」と、山ほど書類をもっ

南出　和余（みなみで・かずよ）
私は、子どもとかかわるのが大好きで、教師を目指してきました。「教育」はつねに、私の最大の関心事であり、いま取り組んでいるバングラデシュの子ども研究が、将来、日本の教育の場に、何らかの形で貢献できればいいなと思っています。

てきてくれて。しかも、保存会の会長に「論文でいろいろ書いたら、ある意味で保存会にマイナスになるかもしれませんよ」と正直に言ったら、「個人的な非難のためではなく、事実を客観的に書くのだから、気にせずにやりなさい」と言ってくれました。

彼らとの間にそのような関係性をつくれたことは、たいへんな喜びでしたし、自信にもつながりました。しかし、他人に知られたくない資料まであえて渡してくれた人たちに対して、その信義を裏切らずに、どこまで客観的に論文に提示できるのか、それが重くのしかかってきて、簡単には書けないなあ、という思いで帰ってきました。

フィールドワークで得たものを形にする

朝倉　私たちはフィールドワークに行って相手を見るのだけれど、実は、自分がいちばん周りの人から見られている存在なんですよね。そういう中で「ラポール」というか、人間関係ができて、情報を得る。そして、それをどう表現するか、それを向こうの人たちにどう返していくか。論文は、その一つの形として出てくるわけですね。高さんはほとんど仕上げに入っているところですが、南出さんは、フィールドワークを終えたばかりで、整理の段階ですね。

南出　データをどう整理するか、いま悩んでいるところです。「ここが知りたい」というのがあってフィールドワークに行ったわけですが、帰ってきて、ではそこから何が言えるのか、と。

指導教官の先生からは「どういう人たちと出会ったかがよく見えるように書くといい」と言っていただきましたが、たんに、傾向や状況を数値的に報告するのではなく、そこでどのように子どもたちが生活していて、学校という場にどうかかわっているかが、生き生きと見えてくるような論文にしたいと思っています。

山本さんのフィールドワークは、アンデス文明の形成過程。
写真は、ペルーのラス・ワカス遺跡に残る巨大建造物の遺構。

山本　睦（やまもと・あつし）
2003年に総研大に入学し、やっと研究者としてのスタートラインに立つことができました。遺跡から問いかけてくるものがあまりに多く、研究テーマがどんどんふえつつありますが、当面の課題としては、アンデス形成期の社会発展のプロセスを考察することと、協力していただいているペルーの人たちとの友好関係を築くことを第一に考えています。

朝倉　山本さんは、「考古学的手法を使った文化人類学」を考えていくわけですね。

山本　はい。そういう意味では、アンデスの考古学的研究を、人類学あるいは現代にどのようにつなげていけるかが今後の課題です。たとえば、遺跡の大規模な公共建造物は、当時の社会的秩序や権力のあり方を反映していると考えられます。そこから、現代国家の枠組みに対する何らかの警鐘を鳴らすといったことも可能ではないでしょうか。

いま、フィールドで得たデータを論文の中でどう表現するかがむずかしいというお話がありましたが、私の場合は、対象である社会の人間は直接見えないわけですから、発掘で出てきたデータをそのまま書けるという点では楽なのかもしれません。ただし、調査中の遺跡が政治的に使われるといった可能性もありますので、データの記述が簡単であるとは一概に言えませんが……。

高　いま東南アジアでは、さまざまな伝統文化が観光開発と結びついて再生されています。私は、仮面劇がいわゆる「創られた伝統」としてではなく、民衆の中に息づく伝統芸能として再生・創造されてきたことを論文で提示したいと思っています。また、時代考証的な研究や「抵抗の文化」といった側面からの論考はありますが、生きた演戯者に着目した考察はほとんど見られませんので、この意味でも、伝統文化をとらえるうえで、一つのケーススタディーになりうるのではないかと考えています。

朝倉　皆さんに、フィールドワークで得られたデータから、ぜひ「生きた」論文を書いてもらいたいと期待しています。

（2003年11月13日、
国立民族学博物館にて収録）
（構成：白石厚郎）

国立民族学博物館の大学院教育

民博には、総研大文化科学研究科のうち、地域文化学と比較文化学の2専攻が設けられている。入学定員は各3人。人類学出身者だけではなく、考古、言語、教育、芸術など多様な分野から入学している。
院生は1年次に、研究計画を立て、リサーチプロポーザルを行う。審査に通ると、1〜2年間フィールドワークに行く。フィールドから戻ってから学位論文をまとめることになるので、在籍は5〜7年にわたることが多い。リサーチプロポーザル、論文をまとめるにあたっての要約の発表などは、教官・学生からなるゼミナール（25ページの写真）にかけられ、自主的な討議が行われている。
学位取得率は高く、卒業生は大学や研究機関などに就職している。